

呼びかけの重ね用法出現の要因

ーフィクションの話し言葉という可能性ー

東出朋(釜慶大学校)

1. はじめに

他者に呼びかけ語を発する際、通常対称詞は1つで十分であると思われるが、対称詞が2つ連続して用いられる呼びかけの現象がある。

- (1) a. 千代さんあんた、気いふれたのか? 「フラガール」
b. 千代さん、気いふれたのか?
c. あんた、気いふれたのか?

(1a) の「千代さんあんた」のように異なる対称詞が2つ連続する形式を東出・松村(2016)は「重ね用法」と名付けた。(1a)の代わりに(1b)「千代さん」や(1c)「あんた」といった選択肢も可能であるはずで、この重ね用法の特徴と機能は検討に値する。

重ね用法における前項と後項は、言語外現実としては同一人物を指示しているが、その方法やその効果は異なっている。普通名詞である前項は、その対象が備えている(と話し手が考えている)何らかの性質や属性を記述しているのに対し、後項は、特に対象の性質を記述しているわけではなく、話し手が聞き手を「あんた」や「おまえ」といった語で指示することが可能であるという、話し手と聞き手の人間関係のみを反映している。以下、前項の普通名詞による対称詞を通常の名詞が対称詞として使用されているという意味で「対称名詞」と呼び、後項の「あんた」「おまえ」などをいわゆる「人称」を表すという意味で「対称人称詞」と呼ぶことにする。

興味深いことに、重ね用法は小説の会話文では頻繁に観察されるが、現実の話し言葉では非常に観察されにくいという事実がある。これは一見すると、フィクションの話し言葉かリアルな話し言葉か、という違いに還元できる。フィクションとリアルな話し言葉においてなぜ重ね用法の使用に差があるのか、について検討するのが本稿の目的である。

2. 関連先行研究

2.1 レジスターの違いと対称詞に関する先行研究

近年コーパスを利用した話し言葉の研究が盛んであるが、山崎(2016, 2017)はレジスター別の話し言葉の特徴を分析している。日本語の会話文の多様性、特に語彙的多様性をレジスターや位相の観点から分析した結果、人称代名詞の使用にもコーパス間の差異が観察され、小説会話には話し言葉に比べて特に多様な人称代名詞が出現するという(山崎2017)。その他、小説や歌詞を対象とした分析(郭2015, 大出・松本・金子2013他)でも、話し言葉とは異なる対称人称詞の使用という特徴が見られる。

2.2 フィクションの話し言葉に関する先行研究

金水(2014)はフィクションの話し言葉について、自然な話し言葉に似ているところもあるが、似ていてもそれは作り手の意図に奉仕する形で利用されており、作品のために再構成された言語であると述べる。山口(1998, 2005, 2011)はフィクションにおけるコミュニケーションを「微視的/巨視的コミュニケーション」という用語で説明している。「微視的コミュニケーション」とは作品世界内の登場人物同士のやり取りを指し、作品という小世界内での伝達であるのに対し、「巨視的コミュニケーション」とは作品の小世界の枠を超えるもので、作者から読者(観客)への伝達である。

フィクションの話し言葉はリアルな話し言葉とは異なる。そして、フィクションには作品内における微視的コミュニケーションと、作品外に向けた巨視的コミュニケーションが存在する。フィクションの話し言葉とリアルな話し言葉の重ね用法を分析するにあたり、この観点は重要である。

3. 方法及びデータ

本稿は、フィクションの話し言葉として小説を、リアルな話し言葉として自然談話を分析する。また、コーパスから対称人称詞を抽出して量的な側面も示す。

4. 分析

4.1 フィクションの話し言葉における呼びかけ語分析

4.1.1 対称名詞の呼びかけ語

小説において、誰の誰に対する発話であるのか、読者は理解できなければならない。作者はそれを作品内で様々な工夫を凝らして実践している。多数の登場人物が同じ場面で話している場合、対称詞と地の文の表現が大いに読者の場面理解に貢献している。

【断片1】

¹ タケイちゃん怒っちゃいや、イシハラが慰めようとした。カネシロが立ち上がって、²でもまあ武器は武器だし、と言った。(中略)³ おいマツヤマ、今なんて言った？ タケイは一昔前の歌手のようにからだを斜に構え、顎を左斜め上に向け、右手の人差し指でマツヤマを指した。(中略)⁴ イシハラさん、マツヤマが引き金を引けば弾が出るって、聞いたようなことをぬかすんですが、それが間違いだって教えてやってもいいですか。そう聞かれて、イシハラが、⁵ タケイ、耳元でそっと教えてついでにこそっとマツヤマの耳たぶ噛んだりするなよ、と言って大笑いした。

村上龍『半島を出よ 下』

この場面では20人の登場人物が話し合っている。地の文で誰が誰に言っているのか示される(点線)と同時に、セリフ内に呼びかけ語が配置されている(下線)ため、読者は誰の誰に対する発話なのか理解できる。

4.1.2 対称名詞と対称人称詞の比較

対称名詞と対称人称詞を両方用いることができる人間関係の場合、そこには使い分けがある。

【断片2】

¹「周作、ついに武士になるか！」(中略)²「周作、のめ、祝い酒だ」(中略)³「しかしだぜ、周作。サンピンでも侍は侍だ、侍には違いない」「そりゃ、そうですけど」⁴「馬鹿だなお前、晴れて苗字がつくんだ。そこがめでてえと言うんだ。苗字がよ」(中略)「考えてみる。おれたち一家は千葉姓を蔭では名乗っている。しかし、出るところへ出て身分を問われてみりゃただの百姓だ。庄屋の手もとにある人別帳(戸籍)には、おれはタダの幸右衛門、お前はタダの周作としか書かれていない。⁵それはお前、おれは松戸にきてから、馬医者稼業の都合上、もっともらしく浦山寿貞と名乗ってはおるさ。しかしこれもお奉行所で通用する名前じゃねえ。役者や浮世絵師と同様、芸名として姓をお上のお目こぼしで私称させてもらっているだけで、人別には幸右衛門、これっきりだよ。千葉幸右衛門じゃない。そこを考えると、お前は」

司馬遼太郎『北斗の人』

身分が低くても武士だからいいと話している間は「周作」と対称名詞で呼びかけている(1~3)が、その後息子が納得しない様子を見て、「馬鹿だな」というセリフを機に「お前」に代わり(4~5)、以降息子を説き伏せる部分では対称人称詞が用いられている。「周作」から「お前」への変更によって父の感情の変化が読者に伝達されることになる。

4.1.3 重ね用法との比較

対称人称詞が使える人間関係では、呼びかけ語として、対称名詞と対称人称詞が連続する重ね用法も選択肢に含まれる。

【断片3】

¹「田沢、お前、本気で読者を泣かせたくて泣かせを書いたことがあるか」何かを言い掛けて、田沢は黙した。(中略)「随分と達観してやがるんだな。らしくねえ」²「田沢」「何だ?」「俺はいつでも下りる。この事故やりたかったら上に言え」田沢は腕を組み、悠木の目を見つめた。

横山秀夫『クライマーズ・ハイ』

悠木と田沢の口論の場面である。1では、田沢に対する反論の軽々しさや誰かに八つ当たりしたい苛立ちなど複雑な感情を背景に重ね用法が出現する。逆に言えば、重ね用法であるからこそ悠木が複雑な感情を抱いていることが分かるともいえる。2では、泣かせ記事を書く意義からデスクを譲ることへとトピックが変わっている。「(デスクから)いつでも下りる」という表現からは悠木の投げやりな感情が伝わり、そこでは対称名詞が用いられている。

【断片4】

「なぜそんな勝手な真似しやがった!」「落とせない現場写真がありました」¹「お前、自分が何をしてかしたかわかってんのか」すごみながら、暮坂は懐から四つ折りにした用紙を取り出してベッドの上に手荒く開いた。(中略)「迂

闊でした」²「謝って済むか。取り返しがつかねんだよ。お前、いったいどう責任取る気だ」(中略)³「なんだそのツラは？ おい、悠木、お前全五段広告が幾らか知ってるのか。」 横山秀夫『クライマーズ・ハイ』

暮坂が悠木に勝手な変更を叱責している場面である。1と2で暮坂は激怒している。憎しみの感情を含む動詞の表現や地の文による感情の表現があり(点線)、そこでは対称人称詞「お前」が用いられている。一方3は、責めてはいるものの、損害金額という話題を持ち出して責め方が変わっており、重ね用法が用いられている。3では1,2同様に対称人称詞「お前」を用いてもいいわけだが、重ね用法によって話し手の感情が1,2とは異なることを伝達している。

4.1.4 対称人称詞を用いることの効果

日本語では、量的にも質的にも使用の一般性という点において対称名詞が中心で、対称人称詞は周辺的である(小林1997; 鈴木1973; 田窪1997)。フィクションでも対称人称詞ではなく対称名詞が基本である。しかしフィクションでは、呼びかけ語に限らず文内の言及としても対称人称詞が頻繁に観察される。対称人称詞の使用は、対称名詞では表せない感情を伝えている。

小説では登場人物たちの複雑な感情が読者に伝達されなければならない。しかし、フィクションの話し言葉には、リアルな話し言葉と異なりパラ言語的・メタ言語的・情報がないため、話し手の細かな感情を全て文章によって表現しなければならない。(断片省略)

悠木の等々力に対する対称詞は、対称名詞「部長」から、口論が激しくなるにつれて対称人称詞「あんた」へ変化した。等々力のほうが立場が上であり「あんた」は本来使用できないが、「あんた」は悠木の強い怒りの感情から用いられている。一方、等々力の悠木に対する対称詞は、いずれも強い感情を含んでいる表現が用いられている。相手を馬鹿にする語

「小僧」、強い怒りの感情を含む対称人称詞「貴様」がある。「悠木ィ」という対称名詞は、「ィ」という表現が怒りの音調というパラ言語的・メタ言語的・情報を示している。対称詞以外の様々なセリフや地の文の表現も話し手が相手に対して怒っているという強い感情を伝えている。

「悠木ィ」を発話するときの等々力のメタ言語的・メタ言語的・情報は「等々力はテーブルに拳を落とした」と地の文で表現される。つまり、パラ言語的・メタ言語的・メタ言語的・情報を欠く小説という媒体では、その不足を表現によって補っている。

地の文による解説やセリフに含まれる強い感情表現である。そして、セリフ中に見られる表現の一つには、対称人称詞の選択も含まれる。

パラ言語的・メタ言語的・メタ言語的・情報の不足を補うもう一つの手段は、表記のバリエーションである。日本語はひらがな、かたかな、漢字という表記のバリエーションによる書き分けが可能であり、作者はその選択によって語が持つ「硬軟」の印象を操作している(佐藤2015)。《おまえ》についてBCCWJ内で検索すると、バリエーションとして「おまえ」「お前」「オマエ」「御前」、音のバリエーションも含めると「おめえ」「オメエ」「オメー」があることが分かる。

(2) 俺は、将来これで食っていけるように野球をしているんだ。おまえ、うちの家が貧乏だってことわかるだろ？ グローブだって高いんだ。 東野圭吾『魔球』

(3) 「大丈夫だ。テメー相手にそんなに面倒な話はしねえから安心しろ。オマエ、スーフリって知ってるか。新聞とかテレビとかで騒がれてるだろ」 山崎マキコ『東京19歳の物語』

作者は、セリフの発話者のイメージを熟慮した上で当該の表記形式を選択している。このような、対称人称詞の表記による情報伝達は、作者から読者へ向けた巨視的コミュニケーションに含まれると考えられる。

対称名詞の使用は、誰の誰に対する発話か読者が分かりやすくなる。しかし対称名詞では表現できない登場人物の感情を表すために、作者は対称人称詞も使い分けている。その延長線上に、対称名詞と対称人称詞による重ね用法が出現すると考える。

4.2 リアルな話し言葉における重ね用法の分析

4.2.1 リアルな話し言葉における重ね用法の有標性

自然談話において、(呼びかけ用法に限らず)対称人称詞の使用に人間関係や場面の制約がある中で、呼びかけ語の重

表1. 悠木と等々力の対称詞の種類

	悠木→等々力	等々力→悠木	その他の感情を伝える表現
1	部長		無にした、羨み、僻んだ
2	部長		大久保連赤がすべて
3	あんた		ゴチャゴチャ言った
5	あんた		
7	そっち		聞け!
8		小僧	吠えるな
9	あんた		大久保連赤が可愛い
10		悠木ィ	(テーブルに拳を落とした)
11		悠木ィ	しやがれ!
12		貴様	貶めやがって、そんな奴、やめろ!、去れ!

ね用法という形式は極めて有標である。リアルな話し言葉の書き起こしを含むコーパスのうち、形態素検索が可能な名大コーパス「ひまわり」を利用して、対称人称詞（言及用法及び呼びかけ用法）を抽出した。その結果、793の対称人称詞が抽出されたが、重ね用法（呼びかけ用法）は1件しか見つからなかった。また、入手可能なその他の自然談話データからは2件観察された。一方、フィクションにおける話し言葉では多数観察される。つまり、重ね用法はフィクションにおける話し言葉の特徴である。リアルな話し言葉における重ね用法は、フィクションにおける話し言葉の特徴を引き継いでいるものであると想定できる。

4.2.2 リアルな話し言葉における重ね用法

リアルな話し言葉において重ね用法が出現するのは極めてまれである。その数少ない重ね用法は、引用節内でしか観察されない。自分もしくは自分以外の人の発話を引用する際、元々の発話とまったく同じものを再現することは（ほぼ）不可能である。

【断片5】

M023：でも変なこと覚えとるねー。

M023：<笑い>ほんつとに変なこと覚えとるわ、あの人。

→M023：M023、お前ああやって言ったじゃねえか、それ忘れてくださいよっていうのを引っ張り出してくる。

F128：うそー。

F128：<笑い>

名大コーパス《data087》

重ね用法が引用部分、つまり他者の発話のスタートである。「M023、お前ああやって言ったじゃねえか」における「M023、お前」は、他者（この場合「あの人」）がM023に言った発話だということを示している。また、「ああやって言ったじゃねえか」という文末表現が今までのM023の発話スタイル「覚えとるねー」「覚えとるわ」とは異なることから、その部分が「あの人」の発話内容であることが分かる。続く「それ忘れてくださいよっていうのを引っ張り出してくる」の「それ忘れてくださいよ」は、M023自身の発話が直接引用として提示されている。「てくださいよ」という文末表現が直前の「言ったじゃねえか」と対応して、「あの人」とM023のおもしろい掛け合いとなっている。重ね用法からスタートする引用部分は、忘れてほしいような変なことを「引っ張り出してくる」という「あの人」について、M023がパフォーマンス的に述べている。直後のF128の笑いからも、→の部分がおもしろいものとして受け止められたことが分かる。

リアルな話し言葉では、重ね用法は引用部分に出現する。重ね用法によって、誰の誰に対する発話か、目の前の聞き手に分かりやすくなる。また、引用は、今ここという次元から離れた発話で、話し手によるある種の創作である。つまり、フィクション的要素がある。したがって、フィクション的要素を持つリアルな話し言葉の引用内部では、フィクションの話し言葉に見られるような重ね用法が出現する余地がある。リアルな話し言葉における重ね用法は、フィクション的な発話として当該発話を聞き手に提示していると考ええる。

5. 終わりに

フィクションの話し言葉では、対称名詞は読者の発話理解を助け、対称人称詞は登場人物の感情を読者に伝達している。重ね用法も、対称名詞単独、対称人称詞単独とは異なる感情を持つ形式として使い分けられている。また、パラ言語的・メタ言語的情報を伝達する手段として、対称人称詞とその表記が効果的に利用されている。フィクションの話し言葉の特徴である重ね用法は、リアルな話し言葉において、フィクション的要素として提示される。

参考文献（一部）

- 東出朋・松村瑞子（2016）．呼びかけ語の二人称対称人称詞—談話における特殊な機能— 言語文化論究, 37, 37-50.
- 金水敏（2014）．フィクションの話し言葉について 役割語を中心に 石黒圭・橋本行洋（編）話し言葉と書き言葉の接点, 1-11, ひつじ書房
- 佐藤栄作（2015）．文字から来る「硬軟」の印象：特集 ことばの「硬さ」「やわらかさ」 日本語学, 34 (1), 46-57.
- 鈴木孝夫（1973）．ことばと文化 岩波書店
- 田窪行則（1997）．日本語の人称表現 田窪行則（編）視点と言語行動, 13-44, くろしお出版
- 山口治彦（2011）．役割語のエコロジー—他人キャラとコンテキストの関係— 金水敏（編）役割語研究の展開, 27-47, くろしお出版
- 山崎誠（2016）．レジスターの違いによる話し言葉の変容」シンポジウム「日常会話コーパス」Iの配布資料